



遠近新聞
第廿四號

定價一匁



西垣文庫
文庫10
7265
22



特 文庫10
7265
22



遠近新聞第二十四号

慶應四年五月廿四日

レヤパンガゼットとり小横濱新聞より
主上還幸の形状を抄出せ

一千八百六十八年六月 日 我慶應四年 昼前四時
於て大坂市街の其都府の四方より輻湊する人々
て群集せり其有様を看るに裸足にて歩行者あり或
は履屨の者もあり又河々も往來の船にて押合たり
扱大名の兵隊の夫々の屋鋪より操出せり其時我の
御門大坂の行在所の近辺ある前日日本人より請取

遠近新聞

第二十四号

百二十



り置し見物場は行くんと欲せし処不斗も日本商人
の何る家屋は於て念頃招待されし我御城近く
来りし時御城の方悉く混雜せり我が朋友の家屋の
建ちし市街に入り来りし時衆多の町役人其町の
木戸は誥掛居し
扱御城廻りの市街は何も高さ関門並見張所を
堅固に新築して西諸候の兵隊是を警固せり我此
丁寧ある主人の下知しし稍善き場所は落付り頃
て下座を命令する大声の聞へり折合ふ人々の
何も黙止しし匍匐頓首の形状を爲し居しりし

大坂は於て御門の重き名代人あり公家の支配し
る軍勢来りし右の公家の立派なる馬は乗り居し
りしが其馬の驅出さん事を恐む彼別當の睨と
其嚙を握り居しり
此公家の太鼓役及び笛役等をして導かむる四隊の
兵卒の後より来りし右兵士の衣服は何も急速
齋へしものありし故に惣体の衣服區々して
恰も虹の如く種々の色を見せし就中人々の帽子
を着るは一度は全地球の人民の物を着る如く黒く
尖りし桶形の帽子あり支那人の冬季は用ゆる木

皮の頭巾有り骨の破きし傘の如く襷積を取し
 木綿にて作りしもの有り亞墨利加の趣きを持つも
 有り佛蘭西の帽子もあまた英吉利海軍製のものも
 あり此内又澳利亞礦夫の冠り物あり獅子の鬣或ハ
 鼠色の熊皮と思ししものも有り又多クハ鉄の兜
 ありしり夫冠り物のことども斯の如く區々あれハ
 日本人の衣服の装ひも尚一定せざる事と思しるべ
 此兵隊の通り過ぎし頃ベルシヤ國の鍛冶師の帽子
 2 稍齋したるものを冠りしる公家一人来りしり彼の

衣服の色合并し品物も種々の物をもて製ししり其
 時大名ホハ外国の施條鏡及び日本の刀劍をもつて
 固めしり諸士を率ひ来たり太鼓笛等ハ是ハ先立ち
 しり此行列の人々も區々しり大小老若肥瘠混合し
 其中より武器を携へしりやく歩行と見ゆるものあ
 り或ハ武器の重き等ハ更ハ苦ハせハ優大ハ歩行し
 るものも有り太鼓役の内一人ハ彼の前ハ荷ひ居し
 る太鼓の面を打ち即我々元来のレジメントの重き
 太鼓役同振の行装しり右太鼓の後しり打居しり諸
 大名の兵士の衣服ハ大槪異同あり各真鍮の牡丹を

結むすび付くる毛織けりの物ものを着きるが但たゞし右衣服みぎのうしろの上うへに木き綿わたを巻まき付くけ其家々そのうちの區別くわくべつを爲なせり其記号きごうの有振ありの
小切せうせつあり十字形じゅうじぎやうあり金剛石きんがうせきの切ききあり三角形さんかくぎやうの
ものあり或あるは其中そのうちに元結もとむすとて肩かたに結むすび付くるが白木しろき
綿わたの切ききあり今いま一般いぱん静しずけりけき路傍ろぼうの人々ひとの深紅ふかこう
色いろあり天蓋てんがいの来きるが音居ねいより右みぎの四よつツの長ながき棒ぼうに
て支さへ剛力ごうりきの士し是こゝを建たてり此棒こゝぼうの間まと天蓋てんがいの下したに
一いっツの輦けん輿い見みへたり其時人々そのときひとの不意ふいに柏手かしと打出うち
し其人々そのひとの見詰みどめ居ゐる向むかひを吾われに告つられり然しかる
時吾われの菊きくの紋もん附つく赤あかき絹ぬいの旗幟しほを見みるが惣そう萌も黄わう

の股引またひきを着きる諸士しよしの取巻とりまき居ゐけるカ士かし若旗わかしほ幟しほを飄ひら
へし静しずま進まと来きり吾われの今人々いまひとの手てを打うち頓首とんすうは
る何故なにゆゑあるやと問とひり日本人にほんじん答こたへて云いふ其御旗そのごしほ也
故ゆゑに人々ひと其を拜禮らいらいするあり
扱御旗あつかごしほ附属ふくしよの人々ひと通とり過すり頃ころ人民じんの柏手かしに止とま
り此こゝを我々われらの先備せんびとおもひ思おもはれり次つぎは来きる所ところの軍ぐん
旗しほの奴僕ぬわくを引率ひんそつしる凡およ二十人にじゅうにん程ほどの公家こうけ馬うま上のりりて
来きり但たゞし其内士そのうちし一人ひとりも何なにもささりし其十人そのじゅうにん或あるは
十二人じふににんづづ歩行ほこうの公家こうけあり引續ひきつづて二ツの棒ぼうにて支さ
へ各おのの腰こしに御簾ごしぜんの窓まどを持もつる小こき白木しろきの輦けん輿いを

勇まゝき昇人は是を荷ひ御門其内は座し玉へり但し
我々の御門の有格を看しとり人ども委は語る事能
くは如何とあれは右輦輿の内は頭頤及び両肩の
見へまばあり扱其朝の晴天にて時氣温和ありとい
へど何故も御門の馬上は座し空は吹く良風を受
玉をざりし何故も容負を其臣下に見せ玉をざり
しぞ

御門とり人ども平人は異り多しなりけり事
り兎角日本人の斯の如き風俗にて御門とり人も
の天よりありたるもの如く思ひて其余の事

を思慮せざるあり右御門の輦輿は衆多の公家の後
より来り次は黒漆を塗りし箱は入し武器を
兵卒大名及び大名の名代人にて警固し来り其行
烈の終りには太鼓並は笛等を持ち多の兵卒来り
且長き棒の先は丁度砂糖樽の如き挑燈を附け日中
とり人ども多人数持ち来るを看し扱見物の群集
一時は騒立ち往来充滿して以前軍旗通行の時よりも
其込合一倍し其群集の人々次第に離散し其
は新規に固めたる場所等の朝廷の名代人是を再び
受取り無程其市街の元の有様とありしとあり

後藤達三記

○湯島天神辺住居の人の話

去る十五日朝五ツ時前ニ官軍方何きの兵ヲ切
 通しより天神辺通行の処近辺ニ彰義隊屯せしと見
 へ表門前より戦争始まり彈丸靈雲寺近辺まで飛び
 来り且砲火の爲めあつん男坂の上の別當の住居
 并ニ土藏及中坂の上も少々焼失せり右の戦争ニ
 彰義隊の間もあつて敗れて上野山内へ引取り官軍追
 々攻寄せ廣小路と山内まで大炮小銃の打合ひと成
 りたり

